

中国新闻奖参评作品推荐表

作品标题	“故宫博物院建院一百周年” 专题报道	参评项目	国际传播	
字数 时长	1304 字；1398 字；1650 字	体裁	通讯	
		语种	日文	
作者 <small>(主创人员)</small>	集体（孔任远、聂芝芯、曾静宁、招嘉虹、李嘉薇、王莹、刘远、李若晗）	编辑	张量、邓敏、甄雪原	
原创单位	中国新闻社	发布端/账号/ 媒体名称	AFPBB News、MSN、东方新报	
刊播版面 <small>(名称和版次)</small>		发布日期	2025 年 10 月 14 日到 10 月 30 日	
新媒体作品 链接	首屏链接： https://www.afpbb.com/search?fulltext=%E6%95%85%E5%AE%AE%E7%99%BE%E5%B9%B4&category%5B%5D=AFPBB%3E%E8%A8%98%E4%BA%8B&category%5B%5D=%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%89%E3%82%AB%E3%83%83%E3%83%97&category%5B%5D=%E4%BA%94%E8%BC%AA&category%5B%5D=%E6%99%82%E4%BA%8B%E9%80%9A%E4%BF%A1 代表作一： https://www.afpbb.com/articles/-/3603950 代表作二： https://www.afpbb.com/articles/-/3603951?cx_part=top_category&cx_position=5 代表作三： https://www.afpbb.com/articles/-/3604270		是否为 “三好作品”	否

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">作品简介</p>	<p>为深入贯彻习近平总书记“两个结合”的重大论断，立足传承弘扬中华优秀传统文化、推动中华文化走向世界的时代要求，中新社持续打造“文化中国”系列日语传播项目，力求提升习近平文化思想的国际传播力。2025年恰逢故宫博物院建院一百周年，中新社以故宫这一世界级文化遗产为载体，讲好当代中国文化事业发展故事。主创团队在创作过程中深入挖掘，选取鲜活案例，突出展现故宫博物院在与公众互动中焕发生命力，从昔日皇家禁地转变为公共博物馆，深受民众喜爱，深深融入大众文化生活。该系列精准对接日本受众文化偏好与认知语境，采用精细化跨文化传播策略，打造高质量传播精品。该系列有效打破海外传播中故宫作为“静态文化遗产”的刻板印象，使故宫的开放、现代运营、文化活化的能力和浓厚人情味等关键形象深入人心，体现出中国文化事业的高水平发展，具有突出的跨文化传播价值与社会影响力。</p> <p>该系列报道发出后，即被 AFPBB News（法新社日文新闻服务）等日本具有广泛影响力的主流媒体网站刊用，同时还获日本多家本土主流新闻 APP 转载，基本覆盖全球日语读者群。该系列报道在故宫博物院建院一百周年之际播发，与同期入境游升温形成同频共振，取得良好国际传播效果和社会效果。</p>						
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">传播数据</p>	<p>全网传播量最高平台发布链接</p>	<p>https://www.afpbb.com/search?fulltext=%E6%95%85%E5%AE%AE%E7%99%BE%E5%B9%B4&category%5B%5D=AFPBB%3E%E8%A8%98%E4%BA%8B&category%5B%5D=%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%89%E3%82%AB%E3%83%83%E3%83%97&category%5B%5D=%E4%BA%94%E8%BC%AA&category%5B%5D=%E6%99%82%E4%BA%8B%E9%80%9A%E4%BF%A1</p>					
<p>该平台传播量</p>	<p>8.5663 万 (不完全统计)</p>	<p>该平台互动量</p>		<p>全网总传播量(万)</p>	<p>26.5 (不完全统计)</p>		

<p>（推 荐 理 由）</p>	<p>该系列报道有效实现了习近平文化思想的对外宣介，并取得在日本多家主流媒体持续、完整落地的显著国际传播效果。作为面向境外受众的深度文化报道，该系列报道以精准的国别化传播策略、创新性的表达，在选题策划、叙事手法等方面展现出鲜明的风格，实现文化认同的柔性传播，有力提升中华文明传播力影响力。同意推荐。</p> <p style="text-align: right;">签名（盖单位公章）： 年 月 日</p>
-------------------------------------	--

此表可从中国记协网 www.zgjx.cn 下载。

中国新闻奖集纳式作品目录

作品标题		“故宫博物院建院一百周年”专题报道				
序号	单篇作品标题	体裁	字数/ 时长	刊播日期	发布端/ 账号/ 刊播版面	备注
1	《故宫新生：从紫禁城到博物院的转变与对话》	通讯	1020 字	10 月 14 日	AFPBBnews	
2	《故宫研学：紫禁城有多少种“打开方式”？》	通讯	1304 字	10 月 20 日	AFPBBnews	代表作
3	《故宫文创：百年博物院的 IP 经营智慧》	通讯	1398 字	10 月 21 日	AFPBBnews	代表作
4	《故宫猫：紫禁城“活文物”的百年守护》	通讯	1650 字	10 月 22 日	AFPBBnews	代表作
5	《故宫志愿讲解员：世界文化遗产的“平民分享者”》	通讯	1448 字	10 月 29 日	AFPBBnews	
6	《故宫古钟表：凝固中西交流史的“高科技文物”》	通讯	1479 字	10 月 30 日	AFPBBnews	
7						
8						
9						
10						
11						
12						

1. 选择集纳式作品中的 12 件单篇作品填报（少于 12 篇的填报全部作品），附在参评推荐表后。

2. 须选择 3 篇代表作，并在“备注”栏内注明“代表作”字样。

3. 填报作品按发表时间排序。


4. 文字内容填报字数，音视频内容填报时长。


5. 广播、电视、新媒体作品在“刊播日期”栏内填报刊播日期及时间；在“刊播版面”栏内填报作品刊播频道、频率、账号和栏目名称。


此表可从中国记协网 www.zgjx.cn 下载。


作品首屏截图及二维码：


AFP BB News Latest Popular News ▾ SDGs Sports ▾ Focus ▾


CNS  2025年 10/30(木) 16:00
【故宫百年】故宫の古時計：中西文化交流を刻む「ハイテク文化財」

CNS  2025年 10/29(水) 16:00
【故宫百年】故宫ボランティア解説員：世界遺産を市民とともに

CNS  2025年 10/22(水) 16:00
【故宫百年】故宫の猫たち——紫禁城を守る「生きた文化財」

CNS  2025年 10/21(火) 16:00
【故宫百年】故宫の文化商品：百年博物館のブランド戦略

CNS  2025年 10/20(月) 16:00
【故宫百年】故宫の学び体験、多彩な「学びの扉」

CNS  2025年 10/14(火) 16:00
【故宫百年】故宫の新たな命——紫禁城から博物院への転換と対話



代表作一：

故宮の学び体験、多彩な「学びの扉」

【10月20日 CNS】休日になると、600年以上の歴史を持つ故宮（紫禁城、[Forbidden City](#)）には、たくさん子どもたちが訪れる。彼らは探偵や魔法使い、小さな皇帝になりきって、紫禁城に隠された秘密を探しに出かける。近年、中国では体験型の学びが盛んになり、故宮は小中学生に人気の学習スポットとなっている。「小さな皇帝の一日」「神獣ハンター」「魔法の故宮キャンプ」など、さまざまなプログラムが子どもたちに新しい故宮の楽しみ方を提供している。

体験学習とは、実際に現地を訪れたり調査したりしながら、教科書の知識を現実と結びつけて学ぶ方法を指す。北京市でこうした活動を企画している教育関係者の黄秋子（[Huang Qiuzi](#)）氏は「体験学習は、知識と子どもの興味を結ぶ『橋渡し』のようなものです。楽しみながら歴史や考古学、自然科学に関心を持てるのが魅力です」と話す。

故宮は、かつて中国の皇帝24人が暮らした宮殿で、70を超える建物が並ぶ。1925年に博物館として開かれてから今年で100年を迎えた。歴史、建築、考古学を学ぶうえで、まさに「生きた教材」といえる。壮麗な殿堂や楼閣から、指輪やボタンのような小物まで、すべてが学びの題材になる。

なかでも人気なのが、「神獣探し」のプログラムだ。故宮には、中国神話に登場する伝説の生き物をモチーフにした装飾が多く、インターネット上では約40種類の「神獣リスト」が共有されている。学習チームはその中から、屋根の上の飾り（脊獣）や竜の形をした排水口（螭首）、門を守る怪獣（椒図）などを「故宮を守る十大神獣」として紹介。子どもたちは探偵のように城内を歩き回り、神獣を探し出す。講師がそれぞれの神獣の由来や物語を説明すると、子どもたちは中国の伝統文化への興味を深めていく。

神獣探しの中でも、太和殿（たいわでん）は欠かせない見どころだ。

講師は屋根の脊獸を「屋根のボディガード」と表現する。紫禁城で最も大きな建物である太和殿の屋根には10体の脊獸が並ぶが、他の建物は9体までしかない。10体目の神獸「行什（こうじゅう）」は雷神の化身とされ、落雷を防ぐ意味があるという。SNSでは、「うちの子が『故宮の屋根には雷さまがいるんだよ!』と嬉しそうに話していた」という投稿も見られた。雨どいの先端にある龍の顔「螭首」、皇帝の権威を象徴する銅の獅子、「中国版ユニコーン」とも呼ばれる獬豸（かいち）なども、人気の神獸だ。

神獸探し以外にも、建築や美術をテーマにした講座がある。今年の夏休み期間、故宮博物院（[The Palace Museum](#)）では「屋根の下の色彩」という授業が開かれ、多くの子どもたちが参加した。故宮にはおよそ9000の部屋があり、その梁や柱を彩る装飾絵画は見どころの一つだ。青緑の花模様、金色の龍、鮮やかな幾何学模様など、色使いは実に多彩だ。中国の伝統色を研究する学者によれば、中国には384種類の伝統色があり、その多くが故宮の建物や文物に使われているという。黄秋子氏は「故宮は、中国の伝統色を学ぶ『生きた教室』でもあります」と語る。

600年以上の歴史を持ち、京都御所の約6倍半の広さを誇る故宮には、まだまだ多くの学びの扉がある。世界最大規模の木造建築群として、建築学の観点から学ぶこともできる。また、数え切れないほどの収蔵品や、そこで起きた歴史的な出来事も、学びの素材として尽きることがない。

かつてはガイドの説明を聞きながら歩くのが一般的だったが、今では子どもたちが自らの興味に沿って発見するスタイルへと変化している。体験型の学びの広がりによって、故宮はより多様な「学びの舞台」となり、子どもたちに歴史や科学、そして東洋の美を自ら探究する機会を与えている。(c)CNS/JCM/AFPBB News

译文：

故宫研学：紫禁城有多少种“打开方式”？

一到节假日，有 600 多年历史的紫禁城（北京故宫）总会迎来许多小朋友，他们化身侦探、魔术师、小皇帝，四处探寻紫禁城的“秘密”。近年，随着中国兴起研学热，紫禁城也成为中小学生学习活动的“胜地”。“小皇帝的一天”“小小密探捉神兽”“故宫魔法研学营”等研学团成为许多学生打开紫禁城的新方式。

所谓研学，是让学生通过实地走访、调查实践等方式，将书本中学到的知识与生活实际相结合的一种学习方式。在北京从事学生研学工作的黄秋子对记者表示：“研学就像是一座桥梁，让通识知识以相对愉快的方式传递给学生，引起他们对历史、地质、考古等学科的兴趣。”

紫禁城曾是中国历史上 24 位皇帝的皇宫，有 70 多座宫殿。1925 年，不再是皇宫的紫禁城化身为北京故宫博物院，至今已有百年历史，是研究中国历史、建筑、考古等学科的生动“课本”。作为一个巨大的文化宝库，博物院内大至亭台楼阁，小至扳指、纽扣等精美藏品，都是很好的研学对象。

在众多研学主题中，紫禁城的“寻兽”之旅是孩子们最喜欢的。紫禁城内有许多以中国传统神话为蓝本的神兽形象建筑构件，仅网上流传的紫禁城“神兽清单”中就包含近 40 种构件。有研学团队挑选了脊兽、螭首、椒图等“守护故宫的十大神兽”，让孩子们以侦探搜寻的方式在紫禁城各处寻找、比对找出目标神兽，再通过老师讲解各个神兽背后的故事，勾起孩子们对中华传统文化的浓浓兴趣。

太和殿是所有“寻兽”队伍必定停留的一站，研学团的老师往往将脊兽形容为“屋顶上的小保镖”。作为紫禁城中最大的殿宇，太和殿的屋脊上足足有 10 个脊兽，而其他哪怕最高等级的古建上也仅有 9 个脊兽。这一多出来的神兽名为行什，传说中，行什是雷公的化身，寓意防雷。有网友在社交平台分享道，她的孩子听完太和殿脊兽的讲解后，逢人就科普：“故宫屋顶有雷神！”除了脊兽，形成“千龙吐水”景观的龙形排水构件螭首，顶着 45 个发髻、代表了皇帝“九五

之尊”的铜狮，有“中国版独角兽”之称的獬豸等神兽都是“寻兽”任务清单上的常客。

除了寻找神兽，紫禁城中的建筑、藏品，也是很好的研学素材。今年在中小学生的暑假期间，故宫博物院又推出了多期故宫知识课堂，其中，“屋檐下的缤纷彩画”课程颇受学生们的欢迎。紫禁城内有近9000间房屋，其中，被认为“最出彩”的地方当属房屋梁枋上的缤纷彩画。这些彩画有的以青绿色团花为主，有的皇气十足画有金龙，有的灵活生动颜色丰富。曾有文化学者翻阅典籍，考据出384种中国传统色，并从几十万件紫禁城的文物中找到了颜色对应者。“我认为，故宫也是中国传统色的非常生动的教室。”黄秋子谈道。

当然，作为一个有600多年历史、足有6.5个京都御所面积的博物馆，紫禁城还有许多“打开方式”。比如，它是世界上现存规模最大、保存最为完整的木质结构古建筑群之一，因此，从建筑学的角度去领略这片“宫殿之海”会是一个不错的选择。另外，紫禁城中丰富的藏品和其自身悠久的历史都很值得去探寻——在过去的600年中，中国有许多大事都发生在这里。

从过往的跟着导游边走边听，到现在让学生们根据自己的兴趣主动去寻找、探索，研学的热潮为紫禁城开启了多种新的“打开方式”，引导孩子们主动探寻景点背后的历史文化、科学与东方美学。(完)

代表作一首页截图及二维码：



一直能用的梯子

资讯Roos

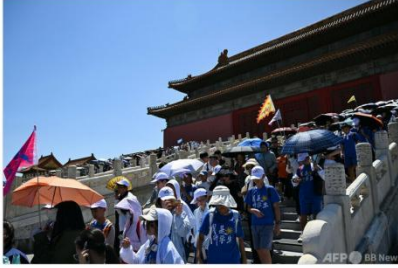
打开

ニュース ライフ From China CNS

【故宫百年】故宫の学び体験、多彩な「学びの扉」

2023年10月20日 16:00 発信地：中国（中国、中国、米国）

CNS



北京、故宮博物院を訪れる多くの来賓者。写真は、体験型学習プログラムに参加する学生グループが2023年7月18日撮影。資料写真はCNS国際写真

【10月20日 CNS】休日になると、600年以上の歴史を持つ故宮(紫禁城、Forbidden City)には、たくさんの子どもたちが訪れる。彼らは探検や魔法使い、小さな皇帝になりきって、紫禁城に隠された秘密を探しに出かける。近年、中国では体験型の学びが盛んになり、故宮は小中学生に人気の学習スポットとなっている。「小さな皇帝の一日」「神獣ハンター」「魔法の故宮キャンプ」など、さまざまなプログラムが子どもたちに楽しい故宮の楽しみ方を提供している。

体験型学習とは、実際に現場を訪れたり観望したりしながら、教科書の知識を感覚も感じながら学ぶ方法です。北京でこうした活動を企画している教育関係者の黄敏子(Huang Minzi)氏は「体験型学習は、知識と子どもの興味を結び「検定」のようなものです。楽しみながら歴史や考古学、自然科学に関心を持てるのが魅力です」と話す。

故宮は、かつて中国の皇帝24人が暮らした宮殿で、70を超える建物が並ぶ。1925年に博物館として開かれてから今年で100年を迎えた。歴史、建築、考古学を学ぶうえで、まさに「宝庫の宝庫」といえる。壮麗な殿宇や庭園から、柱や石の彫刻のような小物まで、すべてが学びの題材になる。

なかでも人気なのが、「神獣探検」のプログラムだ。故宮には、中国神話に登場する伝説の生き物をモチーフにした彫像が多く、インターネット上では約10種類の「神獣リスト」が共有されている。学習プログラムは名の中から、屋根の上の彫刻(龍)や竜の形をした神水池(龍潭)、門を守る鬼獣(鬼面)などを「故宮を守る十大神獣」として紹介。子どもたちは探検のように城内を歩き回り、神獣を探し出す。講師がそれぞれの神獣の由来や特徴を説明すると、子どもたちは中国の伝統文化への興味を探っていく。

神獣探検の中でも、太和殿(たいわてん)は欠かせない見どころだ。講師は屋根の瓦数を「屋根のゴディーガード」と表現する。紫禁城で最も大きな建物である太和殿の屋根には10億の瓦数が並ぶが、他の建物は9億までしかない。10億の神獣「行什(こうじゅう)」は雷神の化身とされ、雷雲を防ぐ意味があるという。SNSでは、「うちの子が故宮の屋根には雷さまがいるんだよ」と嬉しそうに話していた」という投稿も見られた。雨などの気象に関する「雷さま」、皇帝の権威を象徴する別の神獣「中国龍ユニコーン」とも呼ばれる龍(りゅう)なども、人気の神獣だ。

神獣探検以外にも、建築や美術をテーマにした講座がある。今年の夏休み期間、故宮博物院(The Palace Museum)では「屋根の下の色」という授業が開かれ、多くの子どもたちが参加した。故宮にはおよそ9000の部屋があり、その色や壁を彩る装飾品は見どころの一つだ。青緑の花模様、金色の龍、鮮やかな幾何学模様など、色使いは実に多彩だ。中国の伝統色を研究する学会によれば、中国には384種類の伝統色があり、その多くが故宮の建物や文物に使われているという。黄敏子氏は「故宮は、中国の伝統色を学ぶ宝庫の宝庫でもあり得る」と語る。

600年以上の歴史を持ち、京都府内の約6倍の広さを超える故宮には、まだまだ多くの学びの扉がある。世界最大規模の半田建築群として、建築家の観点から学ぶこともできる。また、数え切れないほどの收藏品や、そこで起きた歴史的な出来事も、学びの素材として見ることができない。

かつてはガイドの説明を聞きながら歩くのが一般的だったが、今では子どもたちが自らの興味に沿って発見するスタイルへと変化している。体験型の学びの広がりによって、故宮はより多様な「学びの舞台」となり、子どもたちに歴史や科学、そして東洋の美を自ら探究する機会を与えている。(c)CNS/JCM/AFPBB News

ニュース提供料について

ライター一覧へ >

メディア・報道関係・法人の方向け「写真・動画購入」のご案内 >

Top stories



ワウキナで新たなロシアの人道に対する露 露軍兵隊

ケニア人が他の国でロシア軍兵隊に助けを要す

今年最後の「1」で外国インフラ建設、汚染対策も課題残る

「ハニエ」で「1」でロシアインフラ建設が再開、70億「世界で一番美しい国」



代表作二：

故宮の文化商品：百年博物館のブランド戦略

【10月21日 CNS】北京市・故宮（紫禁城、[Forbidden City](#)）の城壁の角に、赤い壁と青い瓦屋根が印象的なカフェがある。店の人気メニューのひとつ「康熙帝のお気に入りチョコレート」が来店者の目を引く。伝えられるところによると、清の康熙帝は中国で初めてチョコレートを口にした皇帝だった。当時、彼はチョコレートを薬の一種と勘違いし、イタリアの宣教師に取り寄せを命じたという。だが薬効はなく、期待を裏切られたというこの逸話は、今ではユーモアを添えて現代のカフェメニューに生きている。

歴史や文化を現代の生活に溶け込ませる――それが故宮博物院（[The Palace Museum](#)）の文化商品づくりの核心だ。話題のカフェ「角楼カフェ」はその象徴的な存在である。七宝焼を思わせる模様のカップに、「千里江山図」の色合いを使った抹茶ロールケーキ。かつての皇帝の世界観を感じさせるティータイムは、訪れる人の疲れを癒すひとときとなっている。

カフェの一角には、故宮ブランドのオリジナルグッズを扱う売り場もある。棚には、ユニークな日用品から収蔵品をモチーフにした工芸品まで、多彩な商品が並ぶ。唐代の「雀と花枝文様の鏡」を再現した小型ミラーや、「朕には見透かせぬ」と書かれたシルクのアイマスク、かわいらしい「故宮ネコ」シリーズのフィギュアなどが人気だ。さらに、『養心殿』や『冷宮』といった宮廷ドラマでおなじみの建物名をデザインしたマグネットも、観光客の定番土産になっている。

故宮の文化商品が大きく注目を集めたのは2014年。清の雍正帝を題材にしたアニメーションスタンプがSNS「微信（ウィーチャット、[WeChat](#)）」で爆発的な人気を呼び、博物館としてのブランディングが新たな段階に入った。以来、故宮は豊富な文化資産と現代的なデザイン感覚を融合させ、中国のミュージアムグッズ市場をリードする存在となった。商品は紙製マスキングテープやマグネット、歴史

上の人物をモチーフにしたスタンプから、「千里江山図」や鳳冠、宮殿天井の装飾などを取り入れたデザインへと進化している。

近年のヒット商品は「孝靖皇后の鳳冠マグネット」だ。金属レリーフに宝石の装飾を施した華やかなデザインで、「皇后の冠を持ち帰る」感覚を味わせる。内部には可動部分があり、スマートフォンで読み取るとAR（拡張現実）で映像が楽しめる仕掛けもある。ほかにも光るランタン型マグネットや、種を育てられる花瓶型マグネットなど、体験型のアイテムが人気だ。単なる観賞用ではなく、「触れて楽しむ」「使って楽しむ」製品として進化している。

こうした多感覚体験の発想は、故宮の文化事業が大切にしてきた「人に寄り添う博物館」という理念をよく表している。2024年12月には、障がい者向けに設計された「インクルーシブ・ミュージアム」が故宮内にオープンした。館内には「音で感じる故宮」「手で触れる故宮」「香りで味わう故宮」という3つのテーマゾーンがあり、触って楽しめる中軸線の模型や琉璃瓦の装飾、斗拱（ときょう）の構造模型のほか、鐘や琴など実際に音を出せる楽器も並ぶ。さらに、御花園の香りを再現したアロマは、松の葉、白檀、蜂蜜をブレンドした優しい香りで、嗅覚を通して歴史を感じさせる。こうした五感を使った文化体験は、2025年5月に開かれた「故宮ミュージアム・ユネスコ展」でも紹介され、国際的に高い評価を受けた。

故宮博物院の前院長・単霽翔（[Dan Jixiang](#)）氏によると、すでに2017年には文化商品の年間売上が15億元（約318億2625万円）に達しており、上場企業を上回る規模だったという。現在、故宮ブランドの商品は文房具、コスメ、インテリアなど多岐にわたり、単なる土産品を超えて“文化ブランド”として確立している。故宮の理念は「文化を日常の中へ」。伝統と現代デザイン、職人技、デジタル発信を組み合わせ、文化の新しい形を生み出している。

2025年、故宮博物院は創立100周年を迎えた。来館者の多くが記念や贈り物として故宮グッズを手にするようになり、「故宮からの贈り物」という言葉が象徴的になった。かつて皇帝だけの空間だった紫禁城が、今では多くの人の生活に息づいている。故宮の文化商

品は、歴史と現代を結ぶ架け橋として新たな命を得ている。

(c)CNS/JCM/AFPBB News

译文：

故宫文创：百年博物院的 IP 经营智慧

北京故宫角楼处，坐落着一间红墙碧瓦、古色古香的咖啡店，菜单上，一道热销饮品“康熙最爱巧克力”十分引人注目。有趣闻称，康熙皇帝是中国历史上首位品尝到巧克力的皇帝。当时，他误将巧克力当作一种特效药物，特意下旨命大臣向意大利传教士索取。然而，巧克力并未显现出任何药效，最终让康熙大失所望。而今，这段趣闻留存在故宫的红墙里，以令人会心一笑的方式走进现代人的生活。

将历史文化为今所用，是故宫及众多中国博物馆文创产品的精髓所在。这家咖啡店正是故宫文创的代表项目——故宫角楼咖啡。手握宫廷景泰蓝纹样的咖啡杯，搭配“镇馆之宝”《千里江山图》色系的抹茶卷，一顿宫廷风味的下午茶足以抚慰倦乏的游人。

店中还设有专门售卖故宫文创的区域。货架上琳琅满目，从实用有趣的日常用品到繁复精美的“博物馆文物同款”，应有尽有。参照故宫藏品唐代“雀绕花枝纹镜”设计的化妆镜小巧精致，印有“朕不能看透”字样的桑蚕丝眼罩应景有趣，“故宫猫”系列盲盒摆件活泼可爱。若想体验一下“皇帝瘾”，还有“养心殿”（皇帝重要活动场所）“冷宫”（安置失宠妃子的场所）等宫廷剧中常见宫殿匾额样式的冰箱贴可供选择。

2014年，故宫文创团队发布的一组雍正皇帝动态表情包通过社交平台微信走红，从此故宫文创开启了商业版图的第一站。在十余年的发展过程中，故宫文创凭借文化底蕴和商业活力，在中国博物馆文创业中大放异彩。故宫文创的代表性产品不断迭代，从纸胶带到冰箱贴，从历史人物表情包到以藻井、凤冠、《千里江山图》等重点文物作为灵感的设计，故宫文创与历史文化的互动也愈发深入。

近期，故宫大热的文创产品非“孝靖皇后凤冠冰箱贴”莫属。这款产品以金属浮雕重工制作，珠翠点缀、雍容华美，帮游客实现了带一顶“皇后凤冠”回家的心愿。凤冠装饰内含可动机关，还具备AR互动功能。其他畅销产品还包括能发光的大吉宫灯冰箱贴、可培育种子的文物花瓶冰箱贴。由此可见，“互动性”已成为故宫文创研发的重要方向。与注重收藏展示的潮流玩具不同，故宫文创持续进行“功能叠加”，将产品升级为多感官体验的艺术品。

多感官之路也体现了故宫文创先进的人文理念。在故宫内部，专为残障人士打造的故宫文创融合馆于2024年12月开放。场馆内设置的文化体验区以“听见故宫”“感知故宫”“寻味故宫”三大主题为核心，展出了可触摸的中轴线沙盘、琉璃脊兽、斗拱模型，可奏响的钟、磬、琴等乐器，还有依古方复原的御花园香氛——混合松针、檀香与蜂蜜的气息，让观众通过嗅觉感知历史。这种复合触觉、听觉、嗅觉的多感官文创，于2025年5月“故宫文创走进联合国”主题展中展出，赢得了极高的国际声誉。

据故宫博物院前院长单霁翔透露，早在2017年，故宫文创的年收入就达15亿元人民币，这个数字超过不少上市公司。如今，故宫文创产品类型丰富，涵盖文具、美妆、家居等多个品类，并辐射至更多领域。它早已超越普通纪念品范畴，使故宫从宏伟的历史遗产转变为一个具有广泛影响力的文化符号。故宫文创始终秉持着“让文化走进生活”的理念，将传统元素与现代设计、工艺及网络传播相结合，不断获得高关注度和发展潜能。

2025年，故宫博物院迎来建院百年，故宫文创也不断推陈出新。如今，来到故宫的游客，几乎人手一件文创产品，或自留以作纪念，或作为馈赠亲友的佳礼，完美诠释了“来自故宫的礼物”。从紫禁城到千家万户，故宫文创成功搭建起一座文化的桥梁，使文物以崭新的生命力，融入这个时代的日常叙事。（完）

代表作二首页截图及二维码：

The screenshot shows a news article on the AFP BB News website. The article title is "【故宫百年】故宫の文化商品：百年博物館のブランド戦略" (The Cultural Goods of the Forbidden City: Brand Strategy of a 100-Year Museum). The article is dated 2025年10月21日 16:00 and is in Japanese. The main image shows a display of various cultural goods like pens and magnets. The article text discusses the Forbidden City's brand strategy, mentioning its 100th anniversary and the variety of merchandise available. It also mentions the museum's efforts to create a brand identity through various products and services.



代表作三：

故宮の猫たち——紫禁城を守る「生きた文化財」

【10月22日 CNS】北京市・故宮（紫禁城、[Forbidden City](#)）の神武門の前には、観光客がよく写真を撮る四匹の猫の像がある。すぐそばの「角楼カフェ」では、カップの上に猫のフィギュアを置いて撮影する人も多い。今や猫は故宮のシンボルのひとつであり、観光客と故宮をつなぐ存在として、厳かな宮殿に温かみと親しみを添えている。

いまでは「故宮で猫に会う」「故宮の猫を撮る」ことが一つのブームになっている。スマートフォン片手に「故宮猫マップ」を見ながら猫を探す人も多く、頤和軒や御花園など、猫がよく姿を見せる場所をまとめたリストまで登場している。現在開催中の故宮博物院（[The Palace Museum](#)）の百周年記念展では、夜の展示を見に訪れた人が思いがけず猫に出会うこともある。北京の観光ガイド・李雯（[Li Wen](#)）さんは「昼間に何度も来たことがあるけれど、夜十時ごろに初めて故宮の猫を見て感激した」と話していた。

観光客が見かけるのは、実は故宮猫の世界のほんの一部にすぎない。日が暮れ、朱塗りの門が閉じると、人の姿が消えた宮殿の中にかすかな音が響く。すると、色とりどりの毛並みをした猫たちが静かに現れ、何百年も続く夜の見回りを始める。

故宮に猫が暮らすようになったのは、今に始まったことではない。明・清の時代からすでに「住み込みの住民」として存在していた。当初は広大な木造建築群や穀物庫を守る「ネズミ捕り係」として働いていたが、やがて宮廷生活の一部となっていった。特に猫好きとして知られる乾隆帝は、十匹以上の猫を飼い、自ら名前を付けた。「清寧（[Qing Ning](#)）」「翻雪（[Fan Xue](#)）」「普福（[Pu Fu](#)）」などの猫は、西洋画家・グナティウス・シッヘルバルト（[Ignatius Sichelbart](#)、中国語名：艾啟蒙）の手で『狸奴影』という絵画集に描かれている。

後宮では猫を飼うことが妃や女官たちの楽しみでもあった。猫の名

前や生年月日を記した名簿が作られ、月ごとに「俸銀（手当）」が支給され、専任の世話係もいたという。清の道光年間の猫の名簿は、今も中国第一歴史档案馆に残っている。

王朝の終わりを経て、1925年に紫禁城が一般公開されると、博物館「故宮」として生まれ変わると、一部の猫は市街に戻り、残った猫たちはそのまま故宮に暮らし続けた。現在、故宮博物院には約200匹の猫がいて、その中には当時の宮廷猫の子孫もいると考えられている。

「職員の間では『宮中の捜査官』と呼ばれています」と、故宮博物院の研究者・周乾 ([Zhou Qian](#)) 氏は話す。日が沈み、観覧が終わると、猫たちは巡回を始め、建物を守る。72万平方メートルの広大な敷地でネズミが見つかったことはなく、木造建築が齧られた例もない。前院長の単霽翔氏は「故宮にネズミがいないのは猫たちの働きのおかげだ」と語っている。

ドキュメンタリー『我在故宮修文物（訳：私は故宮で文物を修復する）』では、修復師の王津 ([Wang Jin](#)) 氏が作業を終えると、故宮の奥で猫に餌をやり、秋の陽だまりを一緒に楽しむ姿が映し出されている。この場面は、多くの人が「理想の職場」と感じた印象的なシーンでもある。いまや職員たちにとって猫は同僚であり友人でもある。皆で名前を付け、餌をやり、病気の世話までしている。かつての皇帝の庭園は、今、人と動物が穏やかに共存する場所になった。SNSでも「故宮の猫」は人気者だ。公式アカウントでは「宮猫記」という連載で猫の日常を漫画で紹介している。「鰲拜 ([Ao Bai](#))」「白点儿 ([Xiao Dian Er](#))」「小崽儿 ([Xiao Zai Er](#))」などの人気猫はネット上で多くのファンを集め、猫に会うことを目的に訪れる人も少なくない。全国からは「慈寧宮の鰲拜へ」「頤和軒の小崽兒へ」と宛てたキャットフードの小包も届く。古い宮殿で小さな命と出会うことに、人びとは不思議な温かさを感じている。

この人気は、猫を題材にしたグッズにも広がっている。故宮出版社は、猫を主人公にした絵本シリーズ「故宮官猫家族（訳：故宮にゃんこ一家）」を出版し、キャラクターは観光バスや遊覧船にも登場

している。2023年には中国児童芸術劇院 ([China National Theatre for Children](#)) と故宮博物院が共同でミュージカル『猫神 in 故宮』を制作し、時を超えて紫禁城を守る猫「宝贝儿 ([Bao Bei Er](#))」を主人公に据えた。

2025年には上海市や北京市など各地で上演されている。脚本家の馮俐 ([Feng Li](#)) 氏は「この猫が故宮の物語を世界に伝えてくれれば」と話している。

故宮の猫たちは展示品ではないが、「生きた文化財」といえる存在だ。百年を迎えた故宮博物院にとって、猫たちの存在は、歴史に息吹を与える象徴となっている。(c)CNS/JCM/AFPBB News

译文：

故宮猫：紫禁城“活文物”的百年守护

在北京故宮的神武门外，许多经过故宮文创商店的游客，会和门前的四个猫塑像合影留念。而一旁的角楼咖啡厅中，不少顾客将一只御猫手办摆在咖啡杯盖上拍照——这是当下最为流行的故宮游打卡方式。猫，已成为故宮的一个文化符号，是公众与故宮互动的“桥梁”，为肃穆的宮墙增添了温暖和活力。

如今，故宮“撸猫”“拍猫”俨然成为一股风尚。不少游客举着手机沿着“故宮撸猫地图”追随猫的身影，还有游客总结出它们经常出没的地点，如颐和轩、御花园等地。近日正值故宮博物院百年院庆特展期间，“下午排队、晚上观展”成为常态，故宮猫也成为不少游客在夜幕中偶遇的惊喜。北京导游李雯告诉记者：“我带外国游客去过许多次故宮，但都是白天。这次晚上十点多观展结束，我第一次见到官猫，特别激动！”

游客所见，其实只是故宮猫世界的“冰山一角”。暮色四合，紫禁城的朱门缓缓关闭。白日里喧嚣的人潮退去，空旷的宮殿间，忽而传来轻微的草叶晃动声，故宮的“夜班卫士”悄然登场。毛色各异的猫，轻盈地穿梭于红墙金瓦之间，开始了它们延续数百年的夜巡。

穿梭在故宫中的猫，并非今日才有的景象。追溯至明清两代，猫便已是紫禁城的“常住居民”。最初，它们是尽职的“捕鼠官”，守护着庞大的木质宫殿群和粮食仓库。深宫岁月漫长，这些毛茸茸的生灵逐渐融入宫廷生活。值得一提的是，乾隆皇帝作为“资深猫奴”，据传至少养过10余只猫，还亲自为它们起名。清宁、翻雪、普福、妙静等小猫形象，被师从郎世宁的西洋画师艾启蒙，绘制成《狸奴影》画册。

在明清时期的后宫，豢养小猫是嫔妃宫女的休闲娱乐方式。小猫们的名字及生辰被登记在“花名册”上，每月有“俸银”，由专人负责饮食与调教。清道光年间的猫名册现存于中国第一历史档案馆。

朝代更迭，帝制终结。1925年，这片宫城从帝王禁苑变为开放的文化空间。据中国官媒报道，当时部分宫廷猫也回归到市井百姓之间，部分依然“驻守”在故宫。如今，故宫博物院仍有将近200只猫，有一部分可能就是之前宫廷猫的后代。故宫，以最大的包容接纳了这些历史的“同行者”。

“我院里的同事们戏称故宫猫为‘大内咪探’。”故宫博物院研究馆员周乾曾在接受媒体采访时说。每日夕阳西下，随着故宫闭馆，故宫猫就开始“巡逻”“放哨”，出没于红墙黄瓦间，帮助故宫“防鼠”，进而保护了古建筑的安全。紫禁城72万平方米的范围内，没有发现过一只老鼠，也没有出现古建筑木构件被老鼠咬坏的问题。故宫博物院前院长单霁翔曾说，整个紫禁城没有一只老鼠，猫功不可没。

纪录片《我在故宫修文物》中，文物修复师王津修补好皇室的精美钟表，照例打开故宫深处鲜为人知的门锁，在台阶上倒上猫粮，和宫廷御猫后代一同享受北京秋日的暖阳。这一场景满足了不少观众对“理想工作”的想象。现在，在工作人员眼中，小猫们不仅是同事，更是朋友，他们自发为小猫取名、投喂、治病。故宫，这座昔日的皇家禁苑，因这份双向的守护，展现出前所未有的人情味。

在社交媒体上，故宫猫的形象被更多人熟知。故宫博物院官方在微博曾推出#宫猫记#栏目，以漫画形式介绍猫的日常趣事。“鳌拜”“白点儿”“小崽儿”等明星猫，不仅成为“网红”吸引众多粉丝，也让“寻猫”成为不少游客游览故宫的一部分。天南地北的游客，

寄来贴着“慈宁宫鳌拜收”“颐和轩小崽儿收”标签的猫粮包裹。人们在古老宫殿与小动物的邂逅中，感受到一种独特的亲切感。

这种关注也催生了故宫猫的文创 IP。故宫出版社出版了以猫为原型的系列绘本“故宫宫喵家族”，小猫与宫殿一同出现，把历史与童趣结合。这些“宫喵”形象还出现在了北京的观光巴士和游船上。2023 年底，中国儿童艺术剧院与故宫博物院联合出品歌舞剧《猫神在故宫》，通过剧中穿越时光守护紫禁城的小猫“宝贝儿”，将“守护”的主题搬上舞台。据悉，今年该剧在上海、北京、广西北流、安徽马鞍山等城市巡回演出。编剧冯俐说，希望这只猫能带着故宫故事走向世界。

故宫猫虽非馆藏珍宝，却是一种“活的文物”。正如故宫博物院百年不只是建筑与文物的纪念，这些猫的存在，也为这段历史注入了鲜活的生命力。（完）

代表作三首页截图及二维码：



【10月22日 CNS】北京市・故宫（紫禁城、Forbidden City）の神武門の前には、観光客がよく写真を撮る四匹の猫の像がある。すぐそばの「角楼カフェ」では、カップの上には猫のフィギュアを置いて撮影する人も多い。今や猫は故宫のシンボルのひとつであり、観光客と猫をなく存在として、静かな宮殿に温かみと親しみを添えている。

いまでは「故宫で猫に会う」「故宫の猫を撮る」ことが一つのブームになっている。スマートフォン片手に「故宫猫マップ」を見ながら猫を探す人も多く、居転軒や御花園など、猫がよく姿を見せる場所をまわったりして登場している。現在開催中の故宫博物院（The Palace Museum）の百周年記念展では、猫の展示を見に来た人が思いがけず猫に出会うこともある。北京の観光ガイド・李雯（Li Wen）さんは「屋敷に何層も来たことがあるけれど、夜十時ごろに初めて故宫の猫を見て感動した」と話していた。

観光客が見かけるのは、実は故宫猫の世界のほんの一部にすぎない。日が暮れ、朱塗りの門が開けると、人の姿が来た宮殿の中にかきかき響く。すると、色とりどりの毛並みをした猫たちが静かに現れ、何百年も続く夜回りを始める。

故宫に猫が暮らすようになったのは、今に始まったことではない。明・清の時代からすでに「住み込みの住民」として存在していた。当初は広大な木造建築群や御物庫を守る「ネズミ捕り隊」として働いていたが、やがて宮廷生活の一部となっていった。特に愛好家として知られる乾隆帝は、十四以上の猫を飼って自ら名前を付けた。「清寧（Qing Ning）」「翊慶（Yi Qing）」「華福（Hu Fu）」などの猫は、西洋画家・グナティウス・シッヘルバルト（Ignatius Sichelbart、中国語名：文敬軒）の手で「猫奴図」という挿絵風に描かれている。

猫では猫を飼うことが妃や女官たちの楽しみでもあった。猫の名前や生年月日を記した名簿が作られ、月ごとに「尊経（Zhun Jing）」が支給され、専任の仕置師もいたという。清の道光年間の名筆は、今も中園第一監史館に残っている。

正統の終わりを経て、1925年に紫禁城が一般公開されると、博物館「故宫」として生まれ変わる。一部の猫は市販に戻り、残った猫たちはそのまま宮に暮らし続けた。現在、故宫博物院には約200匹の猫がいて、その中には独特の宮廷猫の子猫もいと見えられている。

「猫の聖では『宮中の保護猫』と呼ばれています」と、故宫博物院の研究者・周紀（Zhou Jie）氏は話す。日が沈み、静寂が終わると、猫たちは退屈を始める。建物を守る。72万平方メートルの広大な敷地でネズミが見つかったことはなく、虫退治も頼られたりもない。前院長の華福院長は「故宫にネズミがいなかったのは猫たちの働きのおかげだ」と話している。

ドキュメンタリー『故宫宮廷文物（訳：私は故宫で文物を修復する）』では、修復師の王潔（Wang Jie）氏が作業を終えると、故宫の奥で猫に餌をやり、秋の晴だまりを一緒に楽しむ姿が映し出されている。この場面は、多くの人が「理想の職場」と感じた印象的なシーンでもある。いまや職員たちにとって猫は同僚であり友人でもある。猫で名前を付け、餌をやり、雨風の世話もしている。かつての皇帝の御猫は、今、人と動物が穏やかに共存する場所になった。

SNSでも「故宫の猫」は人気だ。公式アカウントでは「宮猫記」という連載で猫の日常を漫画で紹介している。「宮猫（Gu Gong Mao）」「自來丸（Zi Lai Wan）」「小果丸（Xiao Guo Wan）」などの人気猫はネット上で多くのファンを築き、猫の命とを目的に寄付する人も少なくない。企画からは「宮猫愛の絆へ」「猫奴の小さな命へ」と定めたキャットフードの小包も届く。古い宮殿で小さな命と出会うことに、人びとは不思議な温かみを感じている。

この人気は、猫を題材にしたグッズにも広がっている。故宫出版社は、猫を主人公にした絵本シリーズ「故宫宮廷猫族（訳：故宫にゃんこ一家）」を出版し、キャラクターは観光バスや遊覧船にも登場している。2023年には中国児童書術劇院（China National Theatre for Children）と故宫博物院が共同でミュージカル『猫奴 in 故宫』を制作し、時を遡って紫禁城を守る猫「宝貝丸（Bao Bei Wan）」を主人公に据えた。

2025年には上海市や北京市など各地で上演されている。脚本家の高柳（Gao Liu）氏は「この猫が故宫の物語を世界に広げてくれる」と話している。

故宫の猫たちは展示品ではないが、「生きた文化財」といえる存在だ。百年も迎えた故宫博物院にとって、猫たちの存在は、歴史に豊かさを添える命脈となっている。(c)CNS/JCM/AFPBB News

ニュース提供について ライフ一覧へ >
メディア・報道関係・法人の方向け 写真・動画 購入のお問い合わせ >

Top stories

- 宮廷貴族結婚事件、山上皇位継承に宮廷権威揺る
- ウクライナで新たなロシアの人道に対する罪 高連興
- ケニア人が後の選挙でロシア軍事作戦に 政府が警告
- 【ベニスに定評】のピコシニアンドレセンさん死去 70歳「世界で一番美しい少年」

